



巻頭言

学会の成長について

穂坂 衛*

数年前、筆者が何度か理事会の末席を汚していた頃、会長以下役員の方々の目標の一つは、学会の活動を盛にするため会の規模を大きくし運営を容易にすること、累積する赤字を克服することであったが、今や当学会はすでに小学会の域を脱し、念願した中形の学会に成長した。歴史の浅い当学会が年率約 26% の会員の増加を 10 年も続け、他の学会を追い抜き、未だ頭打ちの傾向をみせないのは時代の要請に適合したこともあろうし、会員や関係者の協力により拡大に伴う処置も誤まらず、学問のレベルを維持するとともに、会員に対するサービス、社会に対する貢献も行われてきたからであろう。会誌の年間の総ページ数だけを見ても最初の 9 年間は 360 ページを保ち、以後、第 10 巻は 460 ページ、第 11 巻は 758 ページ、第 12 巻は 804 ページとなったように、拡大の対応策とその時期は会員の総数とその増加会員数に関係している。

今後も当分は同じ割合で成長すると思われるので、今度は急速な絶対量の増大によって生ずる問題を検討する必要が生じてくる。そのために学会の成長の過程の量的分析を行い、その運営に対し適切な指針を与えるようなシミュレーションができるならばはなはだ有難いと思うが、その手段もよくわからないので、まず定性的に学会の最大構成要素である会員の特性について、自分を省りみてつぎのような仮定をたててみた。

(1) 会員は情報処理の分野での各方面の最新の、しかも正しい知識を求め、かつ同じ専門の人々と知識の交流のできることを望む。

(2) 人は必要以上の努力をして他人の論文を読むことには熱心ではないが、自分の論文は査読されたものとして会誌にのることを望む。

(3) 投稿論文は会員数に比例する以上に増大する最後の仮定はつぎのことから出てきたものである。

- (i) 新しく論文を書く人口は新規会員に比例する。
- (ii) 情報処理の各分野や応用は拡大しつつある。(ii)

技術の開発と旧式化が急速であるため、成果の早急な発表を望む。(iv) 2 回以上論文を書く人は、初回より書く抵抗が減る。(v) 共著論文が多いことは、論文を書く人口を増大させる。(vi) 会員の半数は常に過去 3 年以内に会員になった人であり、80% は 7~8 年の会員歴の人達である。したがって論文の生産性の高い会員が多い。

何れも数量的な十分な裏付があるわけではないが、これらの要因によって生ずるであろうと思われることは、会費をあげて会誌の頁数を会員数に比例して増大することには限度があるし、論文査読に要する手間が増大する。また査読者は必ずしも会員数に比例して増加することはできない。査読通過の論文の増大は印刷までの待ちを生ずる。多くの会員は自分の関心のある分野以外の論文が多くなるのに気づく。表現が難解であったり未熟であったりする論文も目につき、他人の論文を見ない傾向を助長する。論文の増加と分野の拡大進歩に比例して解説や講座的の記事を増加させる必要があり、今までそれらの著者の奉仕的な努力に依存したが、これには限度がある、などのことが予想され、何れも会員に不満を与える要素ばかりである。

学会の活動はこれ以外にも多くある。それらより発生する情報は整理されて、各会員が容易に利用できるようにし、また会員の自発的な積極的な活動に対しても会は援助と場を与えるべきであり、それも会員が平等にアクセスでき、かつ会誌にその成果が反映する必要がある。何れも会員の急速な増加によって起る問題があり、中形の学会になったと安心してはならないことになる。

これらの対応策についても会員諸氏の建設的批判と助言を期待し、学会が多くの会員のものとして広い視野に立った上で、役に立つ存在を続けるようにわれわれは一層努力をすべきであると考えている。

* 本学会副会長 東京大学宇宙航空研究所